新しきクリエーター

美の小箱

門脇 正弘

文・伊藤 誠〈美術評論家〉

雪もようの風景の中に枯木が立っている。淡いブルーからグレー、白と、寒色で押した厳しい画面に、一種嫋々（じょうじょう）とした詩情がただよう。油彩画には珍しい日本画的情趣。

県内加東郡の出身。高校卒業後、京都のデザイン会社、友禅染めの会社に勤めたが、農家の父の死を機会に播州へもどり、以来油絵造りと農作業修行の暮らし。「自分の家族が食べるぐらいは自作しています。」

子供のころから絵を描くのが好き。中学、高校では美術部へ籍を置いた。傍ら、生け花にいそしむ。「だれにも言ってませんでした。男の子のやることではなかったですからね」まだ小学校へ上がる前、母が花を活けるたびに批評した。その指摘の面白さを祖母が知り、近くの寺へ通わせて花を習わせた。画面にやや場違いな、季節をことにする花や葉や果実が異次元めいて登場し効果的にあしらわれて情感を深めているが、なるほどこの呼吸、生け花の世界からの活用か…見事。

京都時代、勤めのかたわら美術研究所へ通う。独立美術へ応募し、コンクールへも参加。

当初は人物やら普通の風景、静物等を描いていたが約十年前の帰郷を契機にモチーフは固まった。以来一筋。「野の譜」「大地の譜」「冬の譜」etc。ふるさとの厳しい季節の把握であると同時に「私の気持ちの素直な反映です」—芸術的環境に富んだ京都からの遊離、田舎での孤立感…。逆境に立つ、などといえば今の世に大げさだが、一歩身を引いた地点からのひたむきさはバネになったようだ。

今春ニューヨークで海外初の個展開催。少数ながら彼の地にコレクターも誕生。向こうにはワイエスといった巨人もいるが、人の心のふるさとを追求する画面は、万国共通して観る者の胸へ迫るものだ。今年から独立美術に田近憲三賞が設けられ、第一回目に門脇が受けた。画面から〝冬〟は消えぬかも知れぬが、この人の〝春〟を必ず引き寄せるであろう。

「郷の譜」
(1990年)
門脇　正弘

1941年　兵庫県加東郡社町に生まれる
1960年　兵庫県立社高等学校卒業
1966年　独立展初出品(以後出品)
1975年　京展/市長賞(京都市美術館)
1978年　京都市より生家(現住所)に帰郷
1982年　第25回安井賞展出品(第27回にも出品)
1984年　第1回日本青年画家展/優秀賞
1985年　'85兵庫の美術家展招待出品(兵庫県立近代美術館)
1987年　第30回安井賞展/賞候補
1988年　「ふるさと丹波」絵画展/大賞
1989年　'89現代洋画選抜展
1990年　「兵庫11人の新鋭作家たち」展
　　現在、独立美術協会会友

兵庫県加東郡社町家原787

Photo Masao Kobayashi

神戸の名木

連理のくすのき

舞い降りてきた夜、
シェラメールのクリスマス。

フランス料理

シェ・ラ・メール　にしむら

神戸市中央区山本通2-1-20　TEL　078-242-2467

クリスマスメニューは22日(土)～25日(火)。
尚、お昼(11:30～14:00)は特別メニューの他に、ミニクリスマスメニュー(¥8,000 税サ込)もございます。年末は12月28日(金)まで、新年は1月5日(土)より営業いたします。

クリスマスメニュー

Terrine de canard 〈*Chez la Mère*〉 鴨のテリーヌ シェ・ラ・メール風
Navet farci aux oursins 雲丹と冬野菜の詰物
Pâte de Noël クリスマスのパイ 蟹ときのこの愉快な仲間
Suprême de turbot á la menthe 平目の蒸し煮 香草風味
Granite an cidre et 'Kaki' 柿とリンゴ酒のグラニテ
Filet de bœuf au porto 牛フィレ肉のステーキポルト酒ソース添え
Gâteau de Noël クリスマス菓子
（税・サービス料込み） *Café* 珈琲 ¥15,000

2Fシェ・ラ・メールにしむらは会員制ではございません。どなたでもお入りいただけます。

聖夜に幸せの灯をともす。

テーブルを囲んだときのいつもとは違う笑顔、プレゼントを開けるときのよろこびの顔。こんな風に人を幸せにするためのクリスマスグッズを、準備万端ととのえたクリスマスショップです。

装いに華やかさを添えてくれるバッグを。
●エレヌ・アンジェロバッグ(フランス製)
……110,000円
1階ハンドバッグ売場プレステージ

天使の羽根をつけて、パーティの食卓へ。
●エンゼルグラス…㊥8,000円・㊦6,000円
デキャンタ ……18,000円
5階テーブルコーディネート

足元のコーディネートにも気を配って。
㊤ポロbyラルフ・ローレン
㊥㊦ヴァレンティノ・ガラヴァーニ
ソックス……各1,500円
1階紳士くつ売場メンズアクセサリーショップ

伝統のブルーを、ことしの良き思い出に。
●ウエッジウッド ジャスパーウエア
'90イヤープレート ……10,000円
5階ワールドプレステージ

DAIMARU KOBE
電話(078)331-8121

年内休まず営業いたします。
全館7時まで営業いたします。(30日㊐まで)

神戸クリスマス通り1990

ベルの裏には年代をしるしたメダルが。
●コレクターズ クリスマス オルゴール
〈スイス製〉……11,000円
6階趣味雑貨コーナー

ディナーの席をエレガントに光らせます。
●キャンドルスタンド……10,800円
キャンドル……各230円
5階テーブルコーディネート

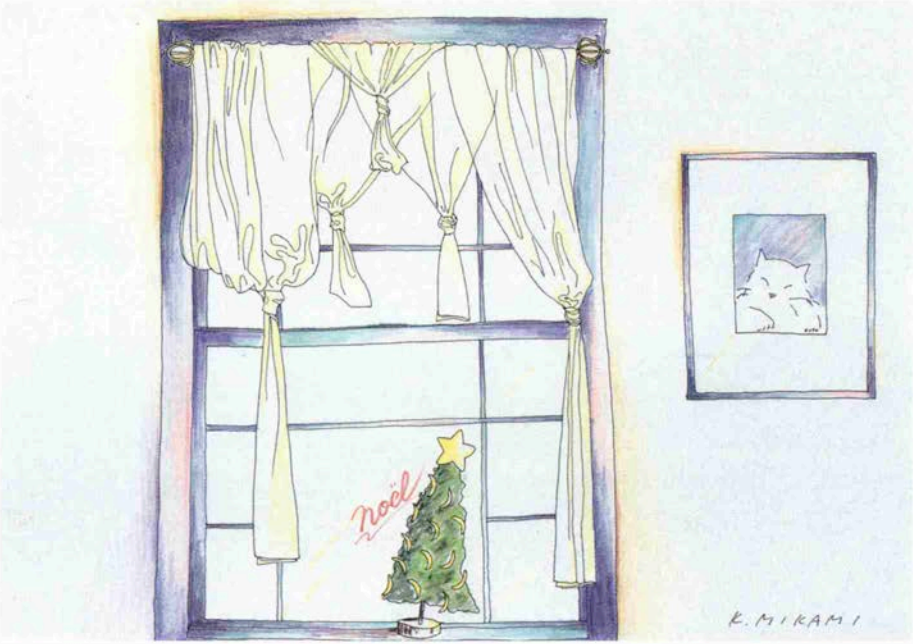
とっておきのスカーフをクリスマスに。
●**エルメス** スカーフ(絹100%)‥36,000円
スカーフリング……22,000円
3階サロン・ド・グゥ エルメスブティック

クラシカルで、コンテンポラリーな香りです。
●ノウイング オーデ パフューム(50mℓ)
…… 10,000円
※この商品をお求めいただけるのは、神戸では大丸だけです。
1階化粧品売場エスティ・ローダーコーナー

●表示価格の3%を消費税として別途頂だいいたします。

あなたの、神戸です。

ファッションパーク ハート・コレクション



夜景のきれいなレストランで
おしゃれなディナーを楽しんだり、
ホテルのパーティーで大騒ぎしたり。
そんなクリスマスから遠ざかったのは、
いまの恋に出会ってから。
一年に一度の特別の夜。
豪華な料理やきらびやかなドレスは
もちろん素敵だけれど、
いまはむしろ大切な人と過ごす
静かであたたかなひとときに心惹かれる。
だから今年は私の部屋で、
ホームメイド・クリスマス。

テーブルには白いクロストと赤いキャンドル。
とっておきのお皿やグラスをセッティングして、
手づくりの料理とシャンパンを。
ドアにはひいらぎのリースを飾り、
BGMは甘いシャンソン。
そしてもちろんインテリアは、
ドレスアップした私。

二人で静かに語り合ったり、食事をしたり。
夜が更けたら
近くの教会のミサに出かけるのもいい。
一年の終わりの、
ちょっぴりセンチメンタルで
ロマンチックなイブの夜。
クリスマスはもうすぐです。

メリーヒル
ゲルラン
ボンフカヤ
シス
ルーブル・ブライダルサロン
ダイアナ
ミッシェル・クラン
クロードレマ
タカノ
ココ山岡

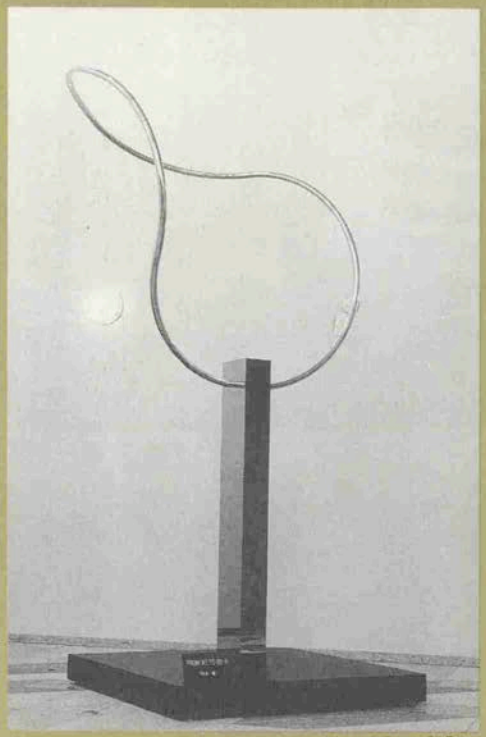
三愛

キャンディッド・マス
メイソングレー
フォーセット
ベネトン
ラッキーズ
ハニーハウス
イーストボーイ
ベネトン・グッズ
フェアリー
ベシェ
リップスター
ベイトンプレイス
ヴィフ
バルナザン
ロイス・クレヨン
アラブダレッック
ミシュー・エタム
アユージェ
クラブ・メッド
リーフノット
ジョセット
アトモスフェール
ヴィッキー
アラン・マヌキャン
キャトルセゾン
ハウスオブローゼ
ワコール
トリンプ
ラパブル
ミセラン
シエル

FASHION PARK

神戸・三宮さんプラザ、センタープラザ3F
営業時間 am11:00－pm8:00　PHONE 078－332－1698

12月は休まず営業いたします



F rom90° to90°「R」
三重県立科学博物館
「こどもの城」
作・松本薫

これは神戸を愛する人々の雑誌です
あなたのくらしに楽しい夢をおくる
神戸を訪れる人にはやさしい道しるべ
これは神戸っ子の心の手帖です。

12月号目次●１９９０・356

表紙／小磯良平
セカンドカバー／西村功
11　神戸っ子'90／風かおる・中西元男
14　ある集い／虹の会・未来カルチャークラブ
17　コウベスナップ
18　美の小箱／文・伊藤誠　　門脇正弘
31　私の意見／西昭道
32　随想三題／冨上芳秀・しまもとなおこ・福岡勝利
35　地域文化論／米花稔
36　連載エッセイ／田中千佳
38　私と神戸／永沢まこと
40　トランペット片手にブラジル一人歩き／右近雅夫
42　〈特集〉Ⅰ「海外から神戸へ」
座談会出席者／新野幸次郎・長島隆・住野佳子
46　〈特集〉Ⅱ寄稿「海外から神戸へ」
赤松徳治（リガ）植松幸二（デュッセルドルフ）
松谷武判（パリ）杉山篤良（ミラノ）平尾千秋（ロンドン）松田高明（ロチェスター）楠本利夫（天津）谷山伸一（シンガポール）宮本照千（クアラルンプール）
66　経済ポケットジャーナル
68　キャンペーン座談会〈グルメ都市神戸の可能性を考える〉
出席者／松宮隆男・中内力・上島達司・岩田弘三
74　ファッションウォッチング
76　ファッションスポット
84　神戸のお嬢さん／ゆうきじゅん・中村俊子
113　コーヒーブレイク
114　動物園飼育日記連載300回記念インタビュー／亀井一成
118　プロフェッサーＰの研究室／岡田淳
120　話題のひろば／ＫＦＦ・グルメプロムナード
128　神戸を福祉の街に／橋本明
135　神戸の集いから
136　百店会だより
138　モダンカルチャー
140　シネマ試写室／淀川長治
142　ぴっといん
144　ポケットジャーナル
147　ＫＦＳニュース
148　るぼるたーじゅ神戸／ブラリーネの館　文・有井基
152　連載小説、壺の中／玉岡かおる
157　神戸っ子倶楽部会員情報
174　ちょっとたたずんで／街角の花⑪／当津隆
176　海船港／戦前の大連航路と幻の客船「浪速丸」文・山田早苗
目次作品―松本薫
カメラ／米田定戯・池田年夫・松原卓也・森田篤志

緑の中のリフレッシュゾーン

西神戸有料道路ひよどりインター北 3km

しあわせの村

雄大な自然に恵まれた総合福祉ゾーン「しあわせの村」。
南欧風の宿泊館・温泉でのびのび…。
スポーツ施設もあり、豊かな緑や花々が
ひととき都会の喧騒を忘れさせてくれる
心のオアシスです。

- 本館・宿泊館…村の総合案内窓口・ホテル・レストラン
- 研修館(勤労者総合福祉センター)…学習研修施設
- 温泉プール・体育館・トレーニングジム
- 運動広場・芝生広場
- 日本庭園
- テニスコート・アーチェリー場・ローンボウルス場

お問い合わせは…

財団法人 こうべ市民福祉振興協会

〒651-11 神戸市北区しあわせの村内
☎(078)743-8181 FAX(078) 743-8180
宿泊・会議室予約専用(078) 743-8000

クリスマス
トラディショナル

クリスマスプレゼントの
セーターそろっています

写真　左　¥18,000
　　右　¥19,800
　　上　¥43,000

MAC
SINCE 1895 KOBE

HEAD OFFICE　7F NEW CENTER 1-6-22／SANNOMIYA-CHO CHUO-KU KOBE CITY 078-392-1651

SANNOMIYA MAC	SANNOMIYA CENTER-GAI 1 078-391-0895
THE BLAZER SHOP MAC	TOR-ROAD 078-391-0896
DOLCE MAC	SANNOMIYA CENTER-GAI 2 078-332-0141
FESTA MAC	HIMEJI FESTA 2F 0792-89-4738
BENETTON MAC	HIMEJI FESTA 3F 0792-22-1333
FUJIIDAIMARU MAC	KYOTO FUJIIDAIMARU 2F 075-211-0857
SUNVIOLA MAC	TAKARAZUKA SUNVIOLA 3F 0797-71-4830
PLENTY MAC	SEISIN PLENTY 2F 078-992-0088

Holy you, I love.

KINOSHITA
PEARL
CO.,LTD.
株式会社木下真珠
〒650 神戸市中央区山本通1丁目7-7（北野坂）
TEL 078-221-3170 10:AM～6:00PM 無休
東京／四ツ谷 大阪／心斎橋

□わたしの意見

ハイビジョンソフトをファッション都市へ活かそう

西　昭道
<NHK神戸放送局長>

神戸へ来る前の一番の期待は、「水がおいしいらしい」という事でした。赤道を越えても腐らない水は世界にもあまりありません。世界中の商船が立ち寄って買って行く程うまいそうです。ところが私が来神した頃は、運悪く異常渇水の頃だった。その為水へのイメージは崩れましたが、人口増の為、琵琶湖や淀川水系に頼らざるを得ないのも一面の現実でしょう。ただ、宮水の水源は大切にして欲しい。「酒もごはんもコーヒーもうまい」という、神戸の〝味〟は大事にして欲しいですね。

もう一つの神戸のイメージは、「街が都会である」という事です。私はどうしても横浜と比較してしまうのですが、横浜の欠点は、東京の亜流になってしまっている事ですね。昔らしい横浜はほんの一部分しか残っていない。「横浜の顔」であるべき伊勢崎町や西口が変ってしまっています。その点神戸は街路樹が繁っていて、潤いがあってとてもいい。海と山が近くて、シャレていて、かつ食べ物がうまくて住み易い街は日本中探しても神戸だけです。又、京都、奈良が近いのも魅力ですね。

よく、「神戸には人が来ない」というジンクスがあると言われます。しかし、私たちの連続テレビ小説「風見鶏」が火付け役となって北野町には人が集まるようになりました。継続的に人が集まるようになったのは、あれ以来の事ですね。今までの神戸は便利すぎて日帰り圏内であった訳です。私たちはこれからも、人が集まる街〝神戸〟を創る中で、情報基地として努めて行きたい。

私たちNHKは4月から放送のやり方を変えました。その中身は、それまでの神戸単独の放送では兵庫県だけしかカバーできませんでしたが今は近畿一円を対象にしています。時間量が変わらないのですから、サービスの低下と言えないこともないですが、情報量全体における神戸の比率は逆に増えつつあります。神戸はファッションの中心として最先端にあります。ミラノ、パリ、ニューヨークと並ぶ神戸ブランドを創って欲しい。私たちはその中で、ハイビジョンの技術で貢献し、そしてソフト面の技術の集積を応用して行きたいですね。

随想三題

古い小船・石阪春生

竹中郁の魅力

冨上　芳秀
〈文芸評論家〉

詩誌「柵」に毎月、「竹中郁ノート」を連載し始めてから、もう半年以上になる。毎回、四百字詰め原稿用紙で十八枚ほどだが、詩集や既刊の単行本以外に初出雑誌を調べるので、たいへんな時間がかかる。先日も、東京の日本近代文学館と神奈川近代文学館に九日間ほど通って資料を収集してきた。神戸の詩人のことを調べるのに東京に行かなければならないのはどうも情けない気がする。関西にも早く近代文学館ができてほしいものだ。

さて、私が竹中郁について書き始めたのは、先日、未来社から上梓した『安西冬衛――モダニズム詩に隠されたロマンティシズム』の流れからであった。しかし、同じモダニズム系列の詩人といっても、安西冬衛と竹中郁とではかなり異質である。竹中の詩は知的で明るく健康でウイットに富む。安西の詩はマニア的な言葉へ偏執のため晦渋であるが、その魅力は耽美的なロマンティシズムにある。特に戦争中の生き方には決定的な違いがあった。安西冬衛はいわゆる戦争詩を書き、戦争に協力しようとした。そのような宣伝的な詩はおもしろくないし、芸術的価値は少ない。

ところが、竹中郁はいわゆる戦争詩というものはあまり書いていない。戦争に対しては熱くはならないで、極めてクールな見方をしている。積極的な反戦思想を表明するタイプではないが、ヒューマニズムに根ざした厭戦思想は随所に見られるのである。

次の詩には、リベラリスト竹中郁の戦争中の生活がよく伺える。

〈びつこを引いて／青葉の下をたのしんで歩いてゐたら／友人の新聞記者に出逢つた／新聞記者は尋問癖を持つた人種だ／僕は「巴里で誂へた靴がたたつて／生まれもつかぬ足の指に肉刺をこしらへた／それが十年この方切つても又出来る／／不思議なことに肉刺が痛むと雨が降る／からりと晴れたお天気には痛くない／まるで靴の中の晴雨計だ」と自慢した／／二三日して寝床の中で新聞をひろげると／僕の喋つたことが肖像つきの記事になつて出てゐる／となりには戦争記事や食糧問題記事が並んでゐる／その日から僕は町の中を真面に歩けやしない〉

（「私は恥かしい」）

竹中郁が発行していた詩誌「羅針」

いかにもパリに留学した神戸の詩人といった感じのイロニーである。世の中すべてが、戦時色に塗り込められた時も、竹中郁はこのように別の生活態度を貫いたのである。家族を大切にし、温かい心が持って生きた竹中郁は先ず人間として尊敬できる詩人であった。

個展を終えて思うこと

しまもと なおこ
〈画家〉

特に一年に一回と決めた訳でもないし、必ずしなければならないという義務感でやっている訳でもないのだけれど、何んとなく毎年やっている個展も終った。今年は梅田のグランドギャラリーで十月一日から六日まで、銅版画と水彩の作品展だった。

わたしの作品は芸術論を語るほどの大層な絵でもないし、ちゃんとしたテーマを決めて制作しているのでもない。

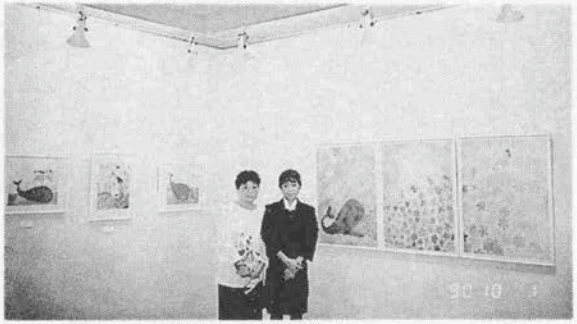
わたしの作品と言うと、俗に言われるメルヘンタッチに近いものだと思うが、メルヘンだからと言って日常とかけ離れているかと言うと、わたし自身の中では、日常生活の中で普通の人なら見逃してしまうような些細なものからでもイマジネーションを膨らませて、ボキャブラリーを増やして行きたいと思っている。

今回の作品でも例えば身近な友人が石垣島に行き、その時の海の話を聞かせてくれる――悲しいかな神戸から脱出出来なかったわたしは、そこで発想の展開を始める。

そういう時にイマジネーションを膨らませてくれる手助けとなるものは、意外と無駄に過す時間なのかもしれない。夏の日の海岸やプールサイドでのシエスタなどは最高の発想源の気がする。寝っころがって瞼に太陽の赤い残像を残しながら、語りべの話のように石垣島のことを聞けたら最高だったかもしれないけれど、残念ながら語りべをして欲しかったその友人とは、夏の太陽を共有する時間がお互い合わなかった。シエスタもいいけれど、何も考えずにゆっくり泳ぐ水面に映るちらちらと掴みどころのない太陽は時間をよぎる泡のようなものかもしれない。そんな水面を見ながらの海への想いからは、鯨が出て来たり、人魚が出て来たり――と言った具合にイメージは広がる。

それから、いつも多く出てくるモチーフの一つの動物――それは一緒にいる犬や猫たち――我が家のメンバーもいれば、拾ってきて里親が決まるまでの居候の時もある。わたしの中で変化して、洋服を着ていたり、ダンスをしていたりしている。余談だけど、個展の案内を差し上げた中で、わたしのかかわった犬や猫を貰って下さった方が来て下さり〝元気にしている〟とか〝大きくなった〟とか近況を聞けるのも個展会期中の嬉しいことの一つだ。

絵を描き続けるということは、とても単純な日常制作のくり返しなのかもしれないけれど、こうして文章に書いてみると、わたしの生活の周辺にいる身近な人間関係や、共同生活体のような犬や猫達に助けられて、続けられている気さえしてきた。



個展会場でのしまもとさん（右）

さんぽ・しまもとなおこ

けさは夢を見た。追いもとめているもの。もっとも興味あるもの。それは夢。無。ぼくはどこへ向かっているのか。時間はすくない。なるようにしかならないか。

腹具合がおかしい。腹がおもしろいようにふくらむ。めしの炊き方がわるいのであろう。

ビデオフレンドで借りていた、ラッフルズホテルを見た。昔の男に会いに来て写真をとってもらう女。よくもまあこういうストーリーで一本の映画をつくり上げたものだ。ちくしょうとしか言いようがない。よくぞやってくれた。たいしたもんだ。藤谷美和子は今何をしているのだろう。

神谷美恵子の、こころの旅が本の山から出てきたので読んだ。結婚とはなんですか。こころの旅ですね。パートナーはその旅の道連れですね。なんやと。なんのこっちゃ。

納税の通知書が落ちていた。税金は納期内に納めましょう。うーん。税金は刑期内に納めましょうに見えてしかたがない。

午前三時までやってるシックスナインへ行った。からだがひえる。雑誌を何冊かそれからおでんを買った。店を出た。

「すみません」

女がかけよってきた。女の手にはメモ帳があった。女はとめてある自転車の列にぶつかった。それでもしつこくついてきた。

「すみません、ちょっと二三分」

なんだい。

「大学を出たばかりの、二十二三の方にアンケートをおねがいしてるんです」

けっこうけっこう。近よるな。うるせえな。誰が二十二三なんだよまったく。人を見る目がねえな。しっしっ。

ぼくは三十三歳。いつだってひとりだよ。

日曜日

福岡　勝利

〈作家〉

日曜日。誰かがドアフォンを鳴らした。新聞の集金人だった。

「寝てたの」

「うん、疲れたから」

「早いんじゃない」

午後七時半ごろだった。缶ビール飲んで煙草吸いつづけていたから頭がくらくらしていた。

福岡さん自筆の自画像